

# 銅人形は街の顔

## ミュージアムより街の雑踏がよく似合う

銅人形が街の記憶を蘇えらせる

模型飛行機を頭上に掲げ、遠く空を見上げる少年。「風に向かって」と題されたこの銅人形は、東京JR立川駅からモノレールの駅と伊勢丹につながる北口デッキに設置されている。足元には飛行機の翼をイメージしたベンチ。少年の夢は大空に向かって大きく翔こうとしている。そんな夢を背中に、頭上を感じながら、多くの人々が行き交う。

立川といえば、知る人ぞ知る飛行機の街である。一九三三年、二人の米国人飛行家が、立川飛行場から飛び立ち、世界初の太平洋無着陸横断飛行を成功させた。今では、世界的なニュースとなったこの大業を知る人は少ない。

この銅人形を制作したのは同市に「BONZE工房」を構える銅板造形家赤川政由氏である。



▲「風に向かって」(JR立川駅北口)  
▲「太陽の子」(玉川上水駅)



「大きなケヤキとカワセミとセロ弾き」(立川市幸学習館)

の町に住む人、その街を訪れる人になりきることが重要ではないでしょうか。

あの「風に向かって」像は、地元でも知る人の少なからず大業を地域の記憶として、後世に伝えるきっかけにしたいと考えたのです」と赤川氏。

アートの力が街に潤いをもたらす

赤川氏が三十三歳のとき、スペインバルセロナの街角で見た「考える牛」。ロタンクの「考える人」のように、座ってアゴを手に載せた牛の像。あふれるユーモアに旅人である氏の心はなごんだ。この出会いが、日本の街角にもこういうものがあるべきだと言う確信を生み、この世界を追求していこうと決意させたのである。

最初の銅人形作品は、埼玉県川口市のJR川口駅前に設置された「ドンキホーテの時計台」だった。キューボラで知られる鋳物の街・川口の活性化につながる作品を得意気込み、川口に日参、地元の人たちと議論を重ねた。できあがった作品は、馬に乗った高さ五メートルほどのドンキホーテ像。街づくりという困難に立ち向かうとする人々の思いを刻み込んだ。



赤川 政由氏

が点在し、市民の笑顔を誘っている。私の作品づくりは、現地を訪ね、地域の情報収集から始まりです。作品がそこに「在りつづける」ためには、その町に住む人、その街を訪れる人になりきることが重要ではないでしょうか。

これまで制作した人形は三〇〇体を超える。設置場所は、北海道から九州まで四十市町村に及ぶ。その街に住む人々の思いを私なりに受け止めて、作品に込める。アートの力で地域社会に潤いをもたらす作品をこれからも作りつづけていきたいですね。



行田市の「童の記憶・大漁」 同・「水まき」

## 札幌競馬場に壁面レリーフ「黄金の仔馬の誕生」が完成



制作中の一頭

日本中央競馬会(JRA)札幌競馬場が、大がかりなスタンド改修工事を終え、七月二十六日オープンした。

家族で楽しめる施設としてさまざまな工夫が凝らされているが、エントランスを入つてすぐの壁面にお目見えした銅板で作られた七頭の馬のレリーフもそのひとつだ。

「黄金の仔馬の誕生」と名付けられたこの作品は、本誌でもたびたびその活躍を紹介している東京藝術大学教授、篠原康治氏の手になるもの。

七頭の中央に位置する「黄金の仔馬」は、今にも飛び出してきそうなく元氣と「気品」を醸し出している。すぐ横には、母馬だろうか、慈愛に満ちたまなざしをふりそそぐ。

制作に一年余を用いたこの力作を前に行き交う人々は、馬たちの力感に圧倒されているようである。

## 「圧倒的な存在感を放つ手作り腕時計」

東京都吉祥寺にある手作り時計専門店「Craftz(クラフツ)」。扉を開けると、タイムスリップしたかのようなどこかレトロで温かい雰囲気包まれる。オーナーであり、腕時計作家の篠原康治氏にお話を伺った。

篠原氏は二十九歳で脱サラし、時計作家に転身した。サラリーマンの時代に訪れた香港で時計工場を見学。十坪ほどの小さなスペース、数種類の工具だけで腕時計が組み立てられていくその姿に感動し、手作り時計の魅力に引きこまれていったという。そこから独学で現在の工房を立ち上げた。今では手作り時計の第一人者となり、「日本手作り腕時計協会」(恵)を設立。若手作家の作品を展示販売するなどの支援も行っている。

篠原氏の時計は、ひとつひとつにまるでストーリーがあるかのように、いつの間にかその世界に引き込まれていく。主な素材は真鍮だが、あえてメッキをかけることで使い込むほどにアンティークのような温かい風合いが増していく。独自の世界である。



篠原 康治氏

## 「宝石のように美しい銅製生活用品」

東京都立川市にある平野工房。ここでは真鍮や銅、銀を使い、食器などの生活用品・アクセサリーを夫婦で制作している。デザインを奥様の平野由美氏が担当し、ご主人の和彦氏が鍛金により作品を作りあげていく。

「私たちが目指すのは見てきれいなだけでなく、使う人の日常生活に溶け込み、長く使ってもらえる作品を作り続けること」と和彦氏は語る。金属の板を槌で叩き、成形していく。その過程で、このデザインが本当にお客さまにとって使いやすい形なのか、手で触れ、感じて調整を重ねていく。「作品と正面から向き合う」この作業がとても重要なのだ。

平野工房の作品は主に大手書店や百貨店の展示会で販売されており、平野夫妻自ら接客を行う。お客さまと直接接することで、制作のさまざまなヒントをもらうことができるという。「お客さまに喜んでほしい」「その強い思いが、実用的で美しい作品を生み出す原動力となっている。」



平野 和彦氏